

# 研 究 紀 要

## 国 語 部 会

### 実践発表 1

「古典作品を題材に新聞記事を作成する言語活動を取り入れた授業実践」

青森県立六ヶ所高等学校 小 松 愛 里 …………… 1

### 実践発表 2

「高等学校国語科における文章表現の授業－SNSの「打ち言葉」に着目した実践－」

青森県立弘前工業高等学校 青 木 雅 俊 …………… 4

### 実践報告

「本校国語科におけるICT授業実践事例」

青森県立青森南高等学校 亀 田 睦 典 …………… 5

### 基調講演

「国語科教育におけるICT利活用について考える」

弘前大学教育学部 准教授 鈴 木 愛 理 …………… 8

パネルディスカッション …………… 14

部 会 の 動 き …………… 18

研 究 テ ー マ …………… 19

紀要編集委員 高 橋 七 海 (青森県立大間高等学校)

# 国語部会

## 実践発表1

### 「古典作品を題材に新聞記事を作成する言語活動を取り入れた授業実践」

発表者 青森県立六ヶ所高等学校 小松 愛里  
助言者 弘前大学教育学部 准教授 鈴木 愛理  
助言者 弘前大学教育学部 助教 帆 莉 基 生  
記録者 青森県立青森北高等学校 玉井 祐美

#### 1 これまでの課題

本校で「言語文化」や「古典探究」「古典B」の授業において、生徒が「内容が理解できない」「勉強する意味が分からない」と答えることが多く、学習意欲の低さが課題となっている。これは他校においても同様であり、本校に限ったことではないと思われる。資料1ページの高等学校学習指導要領の国語科の課題の中に「講義調の伝達型授業に偏っている」という状況を改善して、本校の課題である「古典に対する学習意欲」を高めたいと考え、生徒が学んだことを活かし活動することで古典の内容を正確に理解できるような授業について考えた。

#### 2 授業実践

授業の際、文部科学省から出されている言語活動の充実に関する指導事例集の「漢文の内容を新聞記事にまとめる事例」を参考にした。授業は1学年の言語文化で徒然草「奥山に猫又といふもの」、2学年の古典探究で史記「鴻門之会」で実践した。単元指導計画は資料2ページに表を掲載。教科書本文は資料9ページに掲載。

語句の読みの確認、音読する、副教材等を活用して現代語訳をする活動を2～3時間程度で行い、その内容を踏まえて新聞記事を作成し、授業の最後に言語活動に対する自己評価を1時間で実施した。

新聞記事の作成にあたり2～3人のグループを組み、資料5、6ページにあるワークシートを配布して、古典作品の内容を的確に把握するために記事に盛り込む項目を事前に説明した。項目①「見出し文」には作品の見どころや注目点、項目②「前文」には、あらすじや要旨を簡潔に、項目③「本文」には詳細な説明等、項目④「写真およびその説明文」には教科書の写真を新聞に掲載したと仮定し、その説明をするよう生徒へ指導した。

生徒はタブレットを使って新聞記事を実際に調べ、難解語句の意味を確認しながら作成した。完成作品は資料7、8ページに掲載。

授業の終わりに、Google フォームを活用して振り返りを行った。学習に取り組む態度を5段階評価で自己評価し、活動に関する振り返りを記述で入力させた。

#### 3 授業の成果

##### (1) 学習内容の振り返りに繋がった

現代語訳した内容を、教科書やノートで振り返りながら新聞記事を作成したため、学習内容の定着に繋がったのではないかと考える。生徒の振り返りからも、古文に書かれていない内容を書き付け足すことで、古文の理解を深めることができたという回答が見られ、今回の言語活動が内容の復習に役立ったことがうかがえる。

##### (2) 表現を考えるきっかけとなった

新聞記事を作成するにあたって、生徒たちに自分が新聞記者になったつもりで、読む人に伝わりやすい表現を考えるよう指導した。今回の言語活動は、ペアやグループだったので、他者と話し合う中で自分が考えている書き方や表現が相手にとっては分かりづらかったり、異なる解釈であったりすることに気付き、本文を一つ一つ丁寧に吟味する様子が見られた。生徒の振り返りからも、表現を意識した生徒がいることが分かった。

##### (3) 新聞の構成を知ることができた

生徒は普段、全く新聞を読まないため、活動中は新聞記事の書き方に関する質問が多かった。そこでタブレットで新聞記事を検索し、言葉選びや構成について調べて確認することができた。

(4) 教科書に掲載されている絵の意味を理解できるようになった

特に「鴻門之会」では登場人物が非常に多く、活動前は分からなかった生徒が、活動後には、どういう場面で誰がどこにいるのか説明できるようになった。

(5) 活動は生徒にとって楽しいものであった。

冒頭にも述べたが、本校では古典がつまらないと感じ、学習意欲が低いという課題があったが、今回の活動を通してグループで話し合ったり、内容をまとめたりする際に、積極的に授業に参加する生徒が多く見られた。

#### 4 今後の課題

(1) 1時間の授業では新聞記事の完成は難しい。

活動内容を伝えた上で、記事の校正を指導し作成させたが、説明の時間があるため時間内に終わらずに宿題の形で提出するグループが多かった。時間内に終わらせる工夫が必要だと感じた。

(2) 新聞の書き方を理解できなかった生徒がいた

活動前に記事の校正を説明し、タブレットで調べるよう声掛けをしたが、現代語訳を書き写しただけのグループがいくつか見られた。そのため一文が長くなり、新聞記事の体裁をなしていないため読みづらかった。読み手のことを考えた書き方や表現を他の単元においても継続して指導して必要があるのではないかと感じた。

(3) 評価基準・評価方法の工夫の必要性

1クラス40人として2～3人のグループを組んだ場合、15～20の作品が提出されるが、複数クラスになると評価に時間がかかった。また、新聞記事の書き方に拘って「書くこと」の評価になってしまった。客観的かつ公正な評価ができる基準の作成と方法の工夫が必要だと感じた。また、活動前と活動後に単元テストを実施することで今回の活動がどれほど内容の理解や把握に役立ったのか確認できたのではないかと思った。

#### 5 ICT活用の方向性

今後の課題(1)に挙げた時間内に新聞記事を完成させるために、ICTを活用した新聞作成が有効であると考え。例えばGoogleワークスペースの「ドキュメント」を活用すれば、手書きではないがグループで共同編集しながら新聞を作成することができる。画面右上の共有ボタンをクリックすると、アカウント・ユーザー名を入力してグループの仲間と共有できる。同時編集が可能となるので、生徒が書いた文章の間違いを指摘し、予め担当する項目を決めておくことで効率よく作成することができるのではないか。また、消極的な生徒でも今回のように能動的な活動を設定することによって、最終的に学習意欲の向上に繋がるのではないかと思う。ICTを活用することで、より効果的な言語活動が可能になるのではないか。

#### 6 さいごに

今後も生徒の力を育み、伸ばすことのできる事業を実践できるようにしていきたい。

#### 7 質疑応答(感想)

亀田先生(青森南高校)：

小松先生のレジメを見た瞬間面白い、自分の授業でも取り入れようと思った。この手法を取り上げたきっかけは、古典に対するモチベーションの低さという課題の解決だったと思うが、この手法は進学校が目指す国語教育の目的も満たすことができる。現代語訳がゴールだと思っている生徒がいる中で、加工されたものを再加工するという、深いところまで到達していなければ面白い記事は書けない。上手く書けている班の見出しの付け方も面白い。猫又の法師の一連のエピソードのどこに焦点を絞って、どこで読者の目を引くかを考えた見出しとなっている。授業の成果については、一度で五回美味しいというナイスなアイデアだと思い大変参考になった。

藤川先生(大湊高校)：

インプットとアウトプットを同時にする、かつ生徒の主体的な学びの意欲を高める実践だったと思う。早速取り組みたい。新聞に対する抵抗が生徒にあったようだが、最後のワードで作成するという取り組みは、ICT教育に繋がるため今の子供たちに身につけさせたい。様々な能力を身につけさせるための画期的な取り組みだと感じた。

一つ聞きたいことは、資料4ページのさいごの「基礎学力の定着が不十分な生徒が多く・・・」で、主体的に取り組む意欲的な生徒には、十分感じさせることができたと思うが、基礎学力の定着に関して、どのような形で図れたのか、実施された取り組みがあれば聞かせて欲しい。

小松先生（発表者）：

今後の課題であるため、まだ取り組みはできていないが、基礎学力の定着をはかる方法として、定期テストの他に、例えば、絵の説明を再度させる、ペーパーで自分の言葉で書かせるなどの方法で取り組んでいきたい。

古川先生（柏木農業高校）：

意欲の低下という意味で共感できるところが多く、ぜひ取り入れたいと思った。表現をさせる時に色々工夫している点があっている。質問が二つある。一つ目はグループで作業させた時に、個人の評価をどのようにしているのか。また、生徒同士で評価し合ったりしているのか。

小松先生（発表者）：

個人の評価は、グループでの活動の様子や完成された作品を見て行っている。また、完成作品を机上に並べて、全員で見せ合う時間を設定している。

## 高等学校国語科における文章表現の授業 — SNSの「打ち言葉」に着目した実践—

発表者	青森県立弘前工業高等学校	青木 雅 俊
助言者	弘前大学教育学部 准教授	鈴木 愛 理
助言者	青森県総合学校教育センター指導主事	小枝 麻 希
記録者	青森県立青森中央高等学校	中西 拓 朗

### 1 生徒の実態

本校定時制は今年度で閉過程となり、最後の卒業予定生徒は1名という状態である。その1名の生徒が本当にやりたい、本当にやってみたいなど思っているところに徹底的に寄り添った指導をしたいと考えた。ヒアリングをしていく中で、生徒は文章を書くのが難しいと感じているということがわかった。普段の授業等で活動させている時には最低限の文章を作成することができていたため、文章作成が苦手な生徒という認識はなかった。生徒の苦手意識がどこから生まれているのかを探っていたところ、生徒がSNSなどで普段から使用している「打ち言葉」と、作文等で使うべき「書き言葉」が混在しているという状態に、実感の背景があることがわかった。

### 2 指導の経緯

生徒の文章に対する苦手意識の元となっている「打ち言葉」に着目し、読み手に対して自分の思いや考えが効果的に伝わるように書かれているかなどを吟味して、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりすることができるか、指導の工夫を探った。「打ち言葉」を文章表現の授業に用いた先行実践を調査していく中で、感情の共有を図りやすい媒体であるSNSでアカウントを作成し、そこに投稿する文章を考えて実際に発信する活動を通じて、「打ち言葉」に着目しながら感情の共有も図れるような「書くことの学習指導」のあり方を開発していくこととした。使用するSNSはInstagramを選択した。世界的な利用率と特性が適当であると判断したためである。

### 3 実施内容

Instagramの運用については石川侑輝著「平均4.2カ月で1万フォロワーを実現するプロ目線のインスタ運用法」を参考にした。まず、表現や言葉遣いについて考えるコンセプトシートを作成し、どのようにアカウントを運用していくかを考えさせた。コンセプトシートの記入、添削指導はGoogleWorkspaceを活用した。生徒1名に対してGoogle上でやり取りをしたのは、取り組み状況を随時確認し、適宜助言をするためであるが、それに加えて、現時点での「打ち言葉」の実際を見たかったということも目的であった。コンセプトシート上では違和感のない言葉遣いだったが、SNS上の読み手を意識した表現を考えさせたところ、生徒の思考を促すことができた。

アカウントを作成し、プロフィール文を作成させたところ、「木工好きな少年です。よろしくお願ひします。」と書いただけであった。文章を読ませるといよりは、視覚的に伝わるような工夫が必要であるという助言をしたところ、使用する言葉などに変化が見られた。投稿内容を視覚的に伝える意識を反映させるために、編集アプリケーション「Canva」を活用した。その結果、生徒は投稿用の画像をうまく作成することができていた。

### 4 まとめ

今回の授業では、1名の生徒のみを対象としたため、感情の共有を図ることができなかった。また、複数の投稿を作成できなかったことから、読者の反応の違いから文章の特徴を理解することができなかった。今後は、生徒が普段使用している打ち言葉から書き言葉への指導の流れを継ぎ目なく行えるように工夫する必要がある。

## 「本校国語科における ICT 授業実践事例」

発表者	青森県立青森南高等学校	亀田 睦典
助言者	弘前大学教育学部 准教授	鈴木 愛理
助言者	弘前大学教育学部 助教	帆 莉基生
助言者	青森県総合学校教育センター指導主事	小枝 麻希
記録者	青森県立青森南高等学校	高橋 公子

### 1 はじめに

現在、青森南高校は全く新しい流れを作ろうとしている。令和6年度入学生の教育課程表を用いて説明する。

どの学校でも、今の共通テストに対応するためには、現在論理国語と文学国語と古典探究を実施することが理想だと思うが、国語科だけで12単位占領するのは現実的に難しい。そうすると多くの学校では、文学国語の扱いをどうするかが問題になっているのではないかと。国語科の教員としては、果たしてそれでいいのかと感じている人も多いのではないかと。文学国語でなければ教えられないこともあるはずだ。そこで、ICTを利用することで何とかできないかということも今回の裏のテーマである。

### 2 本校の IT 環境

本校では、「Windows タブレット」を1人1台持たせている。持ち帰りは自由だが、充電は各自自宅ですべてのこととなっている。校舎内全域のWi-Fi化は済んでいるものの、学年200名がクラス内で同時接続すると不安定になる。1クラス40名の同時接続は安定的であり、授業での使用は特に問題ない。ソフト面では、全学年でデータ共有と連絡ツールとしてGoogle classroomを活用しており、それに加えて、1・2学年のみClassiとPスタディを導入している。これは新課程世代対策や学びの個別最適化を目的として導入した。

### 3 問題意識

#### (1) 国語教育と IT 環境との相性

事前アンケートにもあるように、どうしても横書きのデバイスが多いし、スクリーン自体も横長でどうしても横書き文化の機会を使うことになる。他にも午前中の発表にあったように、書く力と入力システムのメリット・デメリットなど、国語科教育で従来狙っていた力を、ICTの利活用で本当に保てるのか、身につけることができるのか。

#### (2) 本当に IT 化が省力化につながるのか

苦手な人にとっては余計に仕事が増えてしまう。今まで通りの方がよっぽど省力化だという場合もある。

#### (3) 国語教育の本質は IT 化しても堅持できるか。また IT が本質的な国語教育を支援してくれるか。

これは国語教育の本質の定義から始めなければならないものだが、そこは割愛する。

ひとまず文部科学省の謳っている学びを生徒に提供するという一つの本質の一側面と捉えて、それは国語科の特性上もあると思うが、ITが助けてくれるのか。

以上三つの疑念を、国語科におけるIT利活用に関してデータを取る前提として挙げ、自分達の授業で検証してみようという意図で、各自のICTの利活用によって一年間データを取ってみた。

### 4 実践報告

#### (1) 古典探求 — 授業担当者 亀田睦典

テーマ：「Webを味方につけ、学びの“個別最適化”を実現する」

タブレット、スマートフォン、電子辞書などあらゆる電子デバイスの使用を許可しており、調べる過程で本文の現代語訳が実際に手に入っても構わないとしている。なぜなら「ゴールを教える」のではなく、「ゴールまでの歩き方」を演習することを重要視しているからである。また個人の興味関心に沿っていつ何を調べても構わないとしており、特に教員の号令によって決まったものを一斉に調べるといったことはない。調べている中で、興味が派生していったとしてもそれは気にせず調べさせている。写真のように授業の中では、タブレットを使う者も、使っていない者も両方いる。

現在2学年を担当しているが、今のところ学力が上下二極化しかけており、できればTTを行いたいのだが、教員

数も少ないため実践できない。その代わりに classi の学習動画に出てくる先生を T2 として、生徒の学習に活用している。生徒も自分の分からないところを各自 classi でなかったとしても、他の動画先生に頼れば、TTTT・・・というように、多チャンネル化が叶えられると考えている。

(2) 現代の国語 (R5 年度) — 授業担当者 竹浪直人

テーマ：「Classi 活用で引き出される、生徒の“書く力”～Classi へフォリオ機能の活用～」

本来の使い方としては、さまざまな校外イベントに参加した際の気づきや学びなどを入力しておくことで、三年間の記録が最後に一気に確認できるという機能である。それを国語の授業の中で思考したことについても、思考の足跡としてポートフォリオに残そうとして実験してみた。メリットとしては、授業時間中に書ききることができなかった際に、休み時間や帰宅してからなどいつでも入力可能であるし、教員側も生徒の入力した内容を、いつでもどこでも確認できるということが挙げられる。

(3) 現代の国語 (R4 年度) — 授業担当者 倉内 唯

テーマ：「学習活動の大部分をデジタル化する試み～Google classroom の『課題配信&回収』機能活用実験～」

授業を可能な限りデジタル化したものである。休み時間の内にクラスの生徒全員が Google classroom へログインしておく。そこへ授業者が登場し、本日の課題をスクリーンへ写す。生徒が「現代の国語 room」へ入室すると、本日の課題の「回答フォーム」が用意されているので、生徒各自のペースで「課題」に取り組み、回答を「現代の国語 room」へアップロードする。アップロードされた生徒の回答は、同時に同じ room に入室している者全員で共有する。一昔前までは、班を作って模造紙や付箋紙を配付し、KJ 法・・・としていたものを、タブレットでできるようになった。また授業者も自分の手元に全ての回答が集まってくるという利点がある。

(4) 論理国語 — 授業担当者 高橋 公子

テーマ：「アナログで書いて、デジタルでシェア～Google classroom を用いた意見シェア環境～」

課題提示については、一つ前の現代の国語と同様に、課題を classroom へ提示することで、授業者から教室スクリーンおよび生徒のタブレットへ課題が提示されるようにした。現代の国語では、その後の活動も全て打ち込みという形で行われたが、この授業では、課題に対して 4 人 1 組のグループワーク後、そこで出た答えを記入させたノートを、タブレットで撮影させ、「論理国語 Room」へアップロードさせて共有した。

つまり、ノート（アナログ）で試行錯誤し、執筆するという生徒側の活動は残したまま、デジタルでシェアするという教員側の事務作業効率化を図ったとういことだ。また、Google classroom の「課題配信&回収」機能を活用し、生徒個々の答えをクラス内で共有することもできる。この機能を使うと、投稿者全員の答えがアップロードした順に一覧化され、また教員は、未提出者と提出者をリアルタイムで把握することができる。さらに生徒達の回答を、ボタン一つで全員に共有したり、隠したりすることができるため、教員側が共有するタイミングを選ぶことが可能になる。

(5) PEN 活動 — 担当 三上 しげ子

テーマ：「青南の朝の NIE 教育改革～Google Classroom による意見文シェア～」

本校では、一ヶ月に一度、全校生徒が同じ新聞記事を読み、意見文を書くということを行っている。これまでは紙で配付し、記入させ、集めるという形をとっていたが、今年度からデジタル化を進めた。手順としては、まず生徒は「PEN 活動 room」にアップロードされた課題文を読み、アンケートフォームに意見文を入力し送信する。次に学年の PEN 活動系の教員が、提出された意見文の一覧をスプレッドシートで表示し、エクセルファイルにコピーしてクラス担任が読める様に整える。担任はクラスからよく書けている 2 名の意見文を選び、優秀作品ファイルに貼り付ける。これを繰り返し、年度末には優秀者を選出し年間表彰を行う。これもどちらかというと教員側の作業効率向上を目指した改革であり、デジタル化により省力化ができていていると思う。

(6) 現代文 B — 授業担当者 鈴木 龍子

テーマ：「本校のアナログ活動をデジタルで繋ぐ試み～google forms で受験対策～」

今まで本校で行ってきたアナログのさまざまな活動を、デジタルでつなぐ試みをしている。旧課程最終学年で、Classi も未導入だが、担当教諭の工夫によりどの学年よりもひょっとしたらデジタル化しているかもしれない。以下 2 点紹介する。

### ① 3年生の入試対策

進研模試の過去問を Google で配信し、生徒はそれを予習してきて答えると生徒の回答がグラフ化される。つまり家庭学習をデジタル化することによって、生徒集団の弱点を即座に洗い出し、予習させた上でその弱点を潰すような授業をする。

### ② ペン活動を基にした言語活動

PEN 活動をそこで終わらせるのがもったいないと国語科的に思って、さらに足を伸ばしてみよう関連する資料を読ませようとした授業である。コロナが五類に下がったのに、マスクの同調圧力によってマスクを外せないという記事を PEN 活動で読んだ。そこで、マスクを外せない人間の真理を文学教材（菊池寛『マスク』）から読ませ、次に同調圧力という存在のメリット・デメリットについて広く調査をさせたり、身の回りの同調圧力を発見させたり、マスク以外の他の事例について、すべてデジタルを利用して調べさせる。結果はその場でクラス全員でシェアするので、多様な意見にも触れられる。その後は、多様な意見に触れつつ小論文を書き、その上でディベートする。ディベートの際にまた多様な意見に触れられるし、反証の仕方も学ぶことができる。

このように受験に向けた学習活動をうまくデジタルで省力化しながら、スマートにこなしている一例である。

## 5 結論

以上のように一年間本校の国語科教員が、さまざまに実践した結果として、まずは事務作業効率の強い味方であるし、個別最適化の強い味方とも言える。私の TTTT 作戦のような、生身の人間は1人しかいないけれども、影の支援者たちが、デジタル世界の支援者たちがいるような感覚である。ただ、書く行為を全てデジタル化するのはリスクだなと感じていたところに、午前中青木先生の発表があったので、これはドンピシャだと思った次第である。もし思考と運動に連動性があり、それが理論的につながっているとすれば、それを担保したような授業でなければならないと思っている。そして最後に、今のところはアナログのいいところ、デジタルのいいところを、いわばうまい汁をすすするしかないのかなというのが、仮の結論ということになる。その仮の結論から抜け出すために、続いて鈴木先生の基調講演と、パネルディスカッションがある。

## 「国語科教育におけるICT利活用について考える」

講師 弘前大学教育学部 准教授 鈴木 愛理  
記録者 青森県立青森高等学校 上野 元嗣

はじめに

弘前大学の鈴木と申します。今日はICTがテーマということですが、私自身の資料は紙でお配りしたのだけです。私の専門は文学教育や読書指導で、決してICTの専門家ではありません。ですから今回の講演についてもお話をいただいたとき、お受けするかどうか迷ったのですが、皆さんと一緒に勉強する機会と考えお受けした次第です。個人的に、ICTの利用が得意ということもありません。コロナ禍だった昨年や一昨年であれば講演はZoomで行われていたと思いますが、今年はこのように対面で皆さんにお話することができます。せっかくの対面での講演ですので、話の内容に納得できたらうなずいていただき、内容がよく分からないなと思われましたら首を傾げていただくなどしてもらえますと、ありがたく思います。

今回の基調講演ですが、「国語科教育におけるICTの利活用について考える」ということで、具体的に「こうした方がいい」ということをお話しするのではなく、どのように考えていけば、国語科ならではのICTの利活用ができるのか、その糸口となるようなことをお話しできればと思っています。実践事例について調べると、本もたくさん出版されていますし、インターネット上にもたくさんの事例が報告されています。現場の先生方も、そうした事例の中からできそうなものややってみたいものを参考になさっていると思います。そのようななかで、どのようなものさしで実践事例を見ていくべきなのか、そもそもなぜICTを使わなければならないのかを考えてみたいと思います。

まず、今日、多くの人一台はデジタル・デバイスを持ち、毎日利用しているという現実があります。特に若い人たちはデジタル世代とも呼ばれ、幼いときからパソコン・テレビ・動画アプリなどを利用しており、SNSを中心としたデジタル・テクノロジーが生活の一部になっています。国語科教育は学習指導要領上では、話す聞く・書く・読むの三領域に分かれています。話す聞く・書く・読む言葉をめぐる状況は大きく変わっています。ですから、国語教育における言葉の学び、どういう力をつけていけば良いのかという目標、言語活動の位置づけなどについて、立ち止まって考えるべき時期だと思います。

令和3年度から、GIGAスクール構想のもと、学習者一人に一台タブレットが貸与され、必要に応じて使用するようになってきました。GIGAスクール構想の目的は、文部科学省によればICTを利活用することによって個別最適な学びを達成すること、協同的な学びを充実させること、その結果、主体的対話的で深い学びに向けて授業を改善していくことでした。ICTをただ使えばよいということではなく、このような目的が達成されなければなりません。授業の実践事例は着実に蓄積されていますが、ICTを使った事例のすべてが目的を達成しているわけではありません。ICTは便利なものである一方で、学びの機会を損なうリスクも指摘されています。特にICTをどのように使っていきたいのかというビジョンがないままに導入してしまった場合には、学びの貧困化、画一化といった事態が起こると指摘もされています。また、ICTは手段に過ぎないのではないのかという主張もあります。確かに、ICTを使うことを目的化してしまえばいけないのですが、何らかの手段を用いて目的を達成するのが学習の基本です。目的を達成する過程にこそ、学習者の実態や学びの実態があるとも言えます。だとすれば、教師が目をつけるべきなのは、むしろ手段なのかとも知れません。手段の性質が学びの過程や結果に大きく影響を与える、つまりゴールは一緒かも知れないがどうやって学ぶかによって質が変わってくる、結果も変わってくることもある、ということは、先生方も現場で感じていらっしゃると思います。

率直に言って、ICTを使用しなくても国語科の目指す学びというものは成立すると思います。学習指導要領で求められている目標も、ICTを使用しなくても達成できると思います。ただ、繰り返しになりますが、私たちが国語の授業を行うのは、学習者が日常の言葉、言語生活と言い換えることもできますが、日々暮らしの言葉を豊かにしていくことが目標のはずです。学校を卒業してからの方が人生は長いのですから、言語生活者として自立した主体として生徒を育てていくこと、変化が大きく、しかも予測が難しい社会の中で言葉を学び続けていく態度を養成することを考えなければなりません。高等学校の学習指導要領の目標の項目にも、「生涯にわたる社会生活」という表現が繰り返して出てきます。これは、小学校では「日常生活」、中学校では「社会生活」とされているのですが、高校を卒業したら終わりということではなく、「生涯にわたって」学び続ける態度を養成することが高等学校の任務として求められているのです。スマートフォンやタブレットをはじめとするインターネットに接続可能なデバイスを用いた言語行為が生活の中

で当たり前になっている。それなのにそれらの機器を学習の手段として用いない方が不自然だし、場合によっては不親切と言えるのではないのでしょうか。

生活の中でICTを利用している現状があるため、学校でそれらを使用せずとも生徒に身につけている力も当然あります。一方で、生活で利用しているからこそ身につかないことや気づかないこともあると思います。今日の午前中の発表でもありましたが、何かうまく使えない、使いこなせない、ICTの機器は使えているのだけでも、ほかのところに不具合が出ていることもあるでしょう。国語教師として、学習者がもっている興味・関心・意欲を損なわないように、言葉についての発見をもたらすように、そしてできれば学習課題に夢中になって取り組むことができる場を作りたいという思いは共通していると思われまます。ICTの利活用にどのような可能性があるのか、2ページにお移りください。

#### 確認しておきたい用語など

2ページには、ICTの利活用について考える前に確認しておきたい背景をいくつか挙げました。簡単に少しずつ触れていきます。ICTという言葉とITという言葉があります。昔はITと言うことが多かったと思いますが、ICTには、コミュニケーションのCが入っているというのがポイントです。つまり、コミュニケーションを前提としたITの活用ということを大切にしようという流れがあるのだと思います。もちろん、ITという言葉も使わなくなったわけではありませんし、どちらが正しいということではありません。ただ、「IT, IT」とよく言われていた昔から、今日ICTと言われるようになった背景には、そういう経緯があります。

ICTを使うことを推し進めている背景の二つ目を説明します。PISA(生徒の学習到達度調査)で知られているOECDが、「学びの羅針盤」と訳される「ラーニングコンパス2030」というものを示しています。そこでは、今の世の中を「VUCA」と呼び、Volatility=変動制, Uncertainty=不確実性, Complexity=複雑性, Ambiguity=曖昧性が大きい時代として説明しています。そういう時代に求められる能力とは、自ら変革を起こすために目標を設定し、責任ある行動がとれる力です。これを「学習者のエージェンシー」と呼び、教育はその能力を後押しすることが役割だと提唱しています。1990年代くらいからでしょうか、課題解決能力ということが多く言われるようになりました。もちろん、課題を解決する能力は大切ですが、課題を発見する能力も同じく大切です。そして自分で見つけた課題をみんなで解決していくということが大切です。それはなぜかということ、個人や社会全体のWell-Being, 幸福, よりよく生きるために必要だからだということになっています。

日本ではSociety5.0という言葉もよく聞かれます。狩猟社会(Society1.0), 農耕社会(Society2.0), 工業社会(Society3.0), 情報社会(Society4.0)の次の社会として、2016年に政府の第5期科学技術基本計画で提唱されたものです。それはどのような社会なのかということ、人間中心の超スマート社会で、インターネット上のサイバー空間とフィジカルな現実社会を行き来する社会です。デジタル技術を使いながら、人間ならではの多様な創造力と想像力を発揮して、社会をともに創造していくことが大切だとされています。ほかにも、グローバル化, 多様性, 寛容性など、いろいろな言葉がキーワードとして掲げられています。

これらの背景を受けて、高等学校の学習指導要領では、ICTの利用について、コンピュータや情報通信ネットワークを積極的に活用する機会を設けるなどして指導の効果を高めるようにしなさい、ということが書かれるようになったわけです。

#### 1 ICTによって何ができるか/できないか

では3ページに移り、ICTによって何ができるか/できないかという本題に入っていきたいと思います。具体的なICTの利活用について考える前に、ICTを使うとどのようなことが可能で、どのようなことが不可能なのかを考えてみます。

まず、文書や画像や動画など膨大な量のデータを蓄積することが可能です。これはインターネットを使用しなくても、そもそもデジタル化によって可能なことで、例えばUSBなどを使えば、インターネットを使わなくても紙に比べて大量のデータを蓄積できます。ですが、インターネット上のクラウド機能を使えば、ほぼ無限にデータを蓄積することができますよね。そしてその蓄積したデータから必要なデータを取り出す検索という機能も、普段お使いだと思います。ただ、そのためには検索してひっきりやすひやすに、探しやすひやすにフォルダーを整理しておかなければいけませんし、ファイル名も最初に日付を入れるなどしてわかりやすひやす名前にしておかなければなりません。ただ、これは紙媒体の書類や写真でも同じことです。さらに、その膨大なデータを、他人と共有することができますし、インターネットを利用して様々な情報にいつでも簡単に接続できるということもあります。また、多数対多数、例えばテレビだと、もともとは放送局という1か所から多数の人に発信することしかできなかったのに、両方が多数である、双方向的、インタラクティブ(双方向的)なやりとりが可能で、ICTによって空間的な制約や時間的な制約が少なくなる、かつて

も不可能ではなかったけれど難しかったり手間だったりしたことが楽になるということです。

その一方で欠落することや、気をつけなければならないことももちろんあります。例えば、インターネットで検索することはスマートフォンなどで私たちもよくやりますが、膨大な量の情報をすべて吟味することは物理的に不可能です。検索して何千件と結果が出てきたとき、それらのうちどれが最も適切な情報なのかを判断するためには膨大な時間がかかります。検索した結果が出るまでは簡単ですが、そのあとどうするのかという問題があります。またインターネットでは、自分と意見や嗜好を同じくする情報が集まりやすい仕組みになっていることにも注意が必要です。

ここから先は、話すこと・聞くこと、書くこと、読むことでどんなことがあるかということをお話します。まず、話すこと・聞くことですが、オンライン上のコミュニケーションでは一般にバック・チャンネル行動という、あいづちやうなずき、ジェスチャーといった非言語的なコミュニケーションが少なくなる傾向があるようです。対面型のコミュニケーションについてのこれまでの研究では、言葉だけでなく、非言語的な行動が重要であると言われてきました。それを考えると、人数や形態にもよりますが、オンライン上では、感情や意図の伝達に不具合が生じやすいということが予想されます。またオンライン上でなくても、デジタル機器を操作する際の認知的負荷の大きさが、空間を共有するペアやグループが一緒に作業をする際のコミュニケーションにはマイナスに作用するという研究結果があります。これはどういう実験だったかということ、二人で旅行の計画をたてるという実験だったのですが、そのとき、紙媒体を二人の間に置いて計画をたてるのと、タブレットを置いてやるのと、ノートパソコンを置いてやるのとを比較した・実験でした。二人がどのくらいICTに通じているのかにも関係しますが、紙媒体に比べてデジタルデバイスを置いた方が、その操作に気を取られてしまうし、その操作に費やす認知的タスクが大きくなるので、紙媒体がもっともスムーズに計画作業が進んだそうです。例えば、教室で言うと、複数人でグループを作って何かやりなさいというとき、タブレットを使うよりも紙媒体の方がうまくいくといった話にもなると思います。同じ空間でなければ、タブレットを使う必要があるわけですが、同じ空間の場合では、特にICTになれていない場合だと、学習にかえてマイナスに働く可能性があるということです。

次に書くことについてです。午前中に「打ち言葉」の話が出ましたが、特徴として短いこと、慣用的な語彙・表記方法・文法などから逸脱した言語使用が多いことが挙げられます。ある研究では、言葉を厳密に使い分けることを煩わしいと考え、できるだけ少ない言葉で効率的にやりとりしたいという気持ちが働くということと、自分の気持ちを丁寧に説明することを面倒と捉える傾向が顕著とされています。また別の研究では、情緒面と感情面の配慮に欠けがちで、信頼関係を損ねやすいとされています。これは、「打ち言葉」の問題というよりは、相手が目の前にいないからということも大きいと思います。デジタル世代のSNS使用が、Twitterなどの文字を中心としたやりとりから、インスタグラムのような動画中心のものに移ってきているのも、文字でやりとりすると今述べたような不具合が生じやすいという事情が背景にあると思います。また、対面ではなく、「打ち言葉」つまりインターネット上での文字のやりとりでのコミュニケーションが多くなると、相手の言葉に即応するとか表情を読み取るといった対人関係の力は醸成されなくなっていくとされています。例えば、教室内でも、一緒にいることはいるんだけど、見ているものはタブレット、ということになると、表情を読み取る力などは下がってくるということはあるでしょうし、価値観や世代が異なる相手に理解してもらうことに対して、「別に」みたいな感じで敏感でなくなっていくということです。

次に読むことに関してですが、紙とデジタルとの違いに基本的な違いはないという研究もあるのですが、条件によっては違いが出てくるものもあるということが分かっています。例えば、物語文・フィクションを読む場合はあまり差がないんだけど説明文を読む場合では紙の方が内容を正確に理解できているとか、あるいはテキストが長い場合、具体的には英語では500語以上でデジタルスクリーンに収まりきれないくらいだと紙で読んだ方が読解力が高まるのか、要点を理解するには紙でもデジタルでも差がないが細部の情報を記憶するとか続きを推測しながら読む場合は紙媒体の方がパフォーマンスがよいということが分かっています。先ほどフィクションでは紙とデジタルとで差がないと言ったのですが、フィクションでも精読していく段階、細かい描写や表現に着目しながら読むという段階になると紙媒体の方がパフォーマンスがよいということになります。それから、読者は自分の読みの力を過大評価する傾向があるのですが、その差は紙の方が小さいようです。どういうことかということ、紙の方が、自分の読みの出来不出来を予測できているということです。なぜこのような違いが生じるか、メカニズム自体は解明されてはいませんが留意する必要があります。どういうことかということ、自分の読みの力を過大評価する度合いが強いと、自分は正確に読んでいると思いついでしまうため、読みに際して注意が散漫になるなど、読解にマイナスに影響する可能性があるわけですが。

また、これも読みに関することですが、マーシャルという人が「読みの四つの特徴」として、紙媒体の場合、移動性、紙媒体のもつ質感、対話性、共有を挙げています。一つ目の移動性と四つ目の共有は、タブレットやスマートフォンにより紙媒体でなくても実現可能になっています。マーシャルの研究は2005年のもので、デスクトップ型のパソコンが部屋にあるイメージだったのでしょうが、スマートフォンやタブレットが普及している2023年時点では、移動性と共

有という点はデジタルでも紙媒体でも同じということです。二つ目の紙媒体のもつ質感というのは、ページをめくるときの感触などで、例えば本が終わりに近づいてくると「ああ、もうすぐ終わりだな」ということを、(縦書きの場合は)左手で感じているというようなことです。また、本の内容を思い出すときに「確か、本のまん中あたりの、右下あたりに書かれていた気がする。」といった記憶の仕方です。私たちは本の内容を記憶する際に、視覚や触覚に関連づけている面があるわけです。それらはデジタル・デバイスで画面をスクロールして読む場合には、失われるものだと思います。また対話性についてですが、私たちが本や教科書、プリントなどを読むとき、大事なところに線を引くことがあると思いますが、デジタル・デバイスの場合にはそういうことができません。マウスとかタッチパネルでできる場合もありますが、それではだめだという研究結果があります。タッチペンならどうなのかとか、まだわからない点もあるのですが、紙とペンという形状がよいという結果があるようで、柴田さんや大村さんの研究では、マウスやタッチパネルなどの操作では、その操作に認知的負荷が多くなるためにそうなるのではないかとされています。ただ、これはデジタル世代でも同様なのか、疑っても良いのではないかと個人的には思います。認知的負荷に関連する同じようなこととして、インターネット上でニュースなどを読む際の広告があります。私たちは知らず知らず広告を見てしまうことで、注意が散漫になったり、読解に影響を与えたりということも同じような仕組み(認知的負荷)によって起きているのではないかと考えられます。

このように、ICTは学習の手段として用いるものかもしれませんが、普段の生活でも情報にアクセスするための手段なのかもしれませんが、紙媒体の場合にはあったものが失われることがあります。メカニズムが分かっているものも多いのですが、そういう点に注意して必要に応じた使い方をすることが大切です。

## 2 ICTを利活用した言語活動例

具体的にICTを利活用した言語活動例を少し考えてみたいと思います。1で述べたICTの性格を踏まえたうえで、ICTの利活用について考えてみますが、膨大なデータを蓄積できるという点を活かした利活用としては、例えば学習内容を整理したものを蓄積し、教科や学年を超えてそれを学習者自身が参照できるようにする、あるいは生徒自身の自己評価でも教師からの他者評価でも良いのですが学習評価を蓄積して学びを振り返り見直しをもてるようにする、学習に対する想起の機会を増やす、あるいは読書記録を蓄積する、などがあります。朝読書に取り組んでいる学校も多いかも知れませんが、何を讀んだのかをメモしておく、書名や作者・訳者、読み始めた日、読み終えた日、ページ数、自分がその本をどう思ったか……あまり項目数が多いと続かないのですが、讀んだ本についてメモをしておくといったことがあります。紙媒体でこれらのことをやっても、持ち歩くことが常にはできない、おそらく一年分くらいしか持ち歩くことができないと思います。ポートフォリオなども2年分とか3年分を常備できますし、なくすこともありませんので、より長期的視点でポートフォリオ評価を行うことが可能になります。紙媒体でも不可能ではないのですが、デジタルにすることによってより簡単に行えるということですね。平成28年の中央教育審議会の答申では「長期的な視野で学習を組み立てていくことが極めて重要となる」と言われております。つまり、単元や領域、教科を超えた学習の振り返りが必要なのですが、ICTの利活用はそれを支える一つの手立て、ICTを使えば誰でもできるということではないけれども一つの手立てとして有効なのではないかと思えます。膨大なデータを蓄積できることに加えて、検索機能も有用です。例えば、読書記録から読書傾向を把握する場合、書名や作者、訳者、ジャンルなど、あるキーワードを入れて検索をかけることで、「ああ、自分は文学ばかり読んでるなあ。」、「この作者の本ばかり読んでいるなあ。」、「大体、これくらいで一冊を読み終わるなあ。」など、自分の読書傾向が把握できると思います。一学期の分を二学期が始まったときに振り返り、「じゃあ二学期どうするか。」ということを考える、つまり読書の学習について見直しをもって組み立てていくことができます。自分の傾向を知った上で、「じゃあ、自分は次に何を学習していきたいのか。」ということ、高校生が自分で学習を組み立てていく取り組みを支えることができます。読書記録だけではなく、例えば文学の授業をするときに、新しい単元に入る前に「これまでの文学の授業で何をやったっけ?」ということ簡単に振り返ることもできると思います。あるいは2年生になって、「1年生で『羅生門』をやったと思うんだけど、それぞれのクラスでどんなことやったか、プリントを見せ合ってみよう。」とか、そういうことも可能かもしれません。

インターネットを用いた情報の検索ということもよく行われると思うのですが、調べ学習に役立てることができると思います。ただし、適切なサイトやデジタルアーカイブスを案内するなど、玉石混濁な情報過多の状況に陥らない支援をしないと大変なことになりますよね。「何でもいいから調べなさい。」というふうになると、YAHOOやGoogleでキーワードをいれて、使えそうなものを引っ張ってくるというだけになってしまいます。様々な情報を正確に理解する、意見と事実を判別する、情報の信憑性を判断できる、信憑性のある情報に基づいて論理的に思考できる、そういうことができない状態の人に「インターネットで調べなさい。」と言ってキーワード検索に導いてしまうと、莫大な情報の量に圧倒されて思考停止になってしまいます。そして思考停止から「何か使えそうなものを適当に切り貼りしておけばいいか」

とってコピーが始まるんです。そうなってしまわないように、基本的なルールとして、紙媒体でもデジタルでもよいのですが、情報を正確に理解できる、書いてあることの見解と事実とを判別できる、そういう力をつけてからでないととても危険なことだと思います。

それから、時間的・空間的制約を超えて共有できるという利点を活かすのであれば、初発の感想や振り返りを交流する、書き込んですぐに共有できるものもありますが、それをしてしまうと他の人が書いていることが気になって影響を受けてしまうという場合もあるので、場合によってはFormsなどを使って書いた後に統合したものを示すというのがよいかもしれません。それから、コメント機能を使って書いたものについて交流するとか、授業とは別に国語学習に関する困りごとを相談する匿名のプラットフォームを作って、いつでも投稿可能にするとか、あるいは読書記録を交流して本を薦め合ったり読書の仕方を尋ねてみたりするとか、他学級・他学年、他の学校との交流を行うことに使うこともできます。中学校の事例で、他の学校と交流しているのを見たことがあります。片方は男子校の中学校で片方は共学の学校だったのですが、男子校の先生が「今日は〇〇中学校の人たちと交流するよ。」と言ったら、生徒の一人が「女子としゃべるの嫌だから男子校に来たのに……」というつぶやきが聞こえてきました。いろいろな生徒がいますが、その集団の中に閉じてしまいがちですし、小学校でも中学校でも同質の人が集まりがちなのが学校という場だと思います。高校だと入試がありますから、同じくらいの学力や同じ専門性の人の集まりになります。同質ではない異質人との関わりにはICTを活用できるのではないかと思います。ただし、先ほども述べましたが、同じ空間内で交流するなら、紙媒体の方が有効です。同じ空間でない場合でも、バック・チャンネル行動という非言語的行動が少なくなってしまう、「打ち言葉」だと情緒面・感情面に欠けた表現をしがちですので、そういうことを自覚することから始めなければいけないのかなと思います。

どの言語活動を行うにしても、まずは近くの人とアナログで経験した後にデジタルに移行した方が、おそらくスムーズにできると思います。そのうえで、ICTを利活用することでこそ達成できる学習課題や言語活動の設定することが大切になります。その際に参照されるものとして、既にご存じの方も多いと思いますが、SAMRモデルというものがあります。SAMRモデルとは2010年に示された、授業でテクノロジーを使ってデジタルな学習環境を作る際に参照されるモデルです。下から上に向かって段階が上がってくるイメージで、一番下のS(Substitution)は「代替」で、今まで行われていたものを新しく出現したICTのような別のテクノロジーを使って実現する段階です。今までやっていたことをデジタルで置き換える段階です。次のA(Augmentation)は「拡大」で、ただ手段を代替するだけではなく、テクノロジーを使うことで機能が改善する、省力化・効率化するという段階です。そして次のM(Modification)「変容」の段階が、ICTならではのということになると思います。テクノロジーを使うことで機能・タスクが大幅に変更される段階で、「個別最適な学び」というのがこの段階になると可能になってきます。R(Redefinition)は「再定義」で、テクノロジーを使うことでこれまで考えられなかったこと・できなかった機能やタスクが可能になる段階です。例えば、他の学校の人や違う国の人とつながるといことは、今まではできなかったことなのでRの段階に当たります。

SとAとが充実させる段階、デジタル・トランスフォーメーションという言い方もありますが、MとRとが転換する段階と言えます。SとAとが学習者と情報とをつなぐ接続化の段階、Mは学習の個人化の段階、Rは遠く離れた人とつながる遠隔化の段階という整理もされています。

学校によって機器やWi-Fiの状態などが異なると思いますから、それぞれの状況に合わせてどの段階から始められそうなのかということを考えてながら、少しずつ上(M・R)に向かって実現していくというのが理想的な形かと思います。

### 3 ICTの利活用を学習内容として考える

ICTの利活用を手段としてではなく学習内容として考えるということについて、少しお話しします。2で紹介した活動ではICTはあくまで手段なので、いかに学習課題を設定するか、学習課題に取り組む言語活動としてICTの使用が必然または適切であるかが、学習の成立に大きく影響します。学習者にとって取り組みやすい、魅力的な学習課題が求められるというのはICTと関係なく大事なことで、学習段階・学習過程の設定・整備は大事なことです。

また、ICTの利活用を踏まえて学習活動に取り組むという場合、教師側が配慮や支援することはもちろん大事なのですが、学習者自身が自覚的にそういうことに配慮するということも、国語科としては大事なのではないかと考えています。つまり、言語活動にICTを利用する前段階として、学習者自身が自らの言語生活におけるICTの利活用について振り返ること、例えば自らのスマートフォンの使用時間や使用目的を自覚し、それが理想的でないと感じるならば、どうあることが理想的なのかということを考えてみる、そういうことも国語科の学習内容として必要なのではないかと考えています。

例えば、普段から仕事上でテキストを多く読む職業の人がいます。作家や研究者、編集者などです。そういった人たちを対象にした研究では、そういう人たちは紙媒体とデジタル媒体それぞれの特徴を把握したうえで、目的に応じて両者を使い分け、それぞれ有効な方略を身につけているということがわかっています。ある現象の大まかな傾向をつかみたいときにはデジタル媒体でヘッドラインと写真とをとばし見して、詳細な情報を正確に得たいときには、プリントアウトして他の情報へのリンクがあえてできない状況を作り、テキストの情報理解に集中する、ということを選んでしているそうです。こうした使い分けや方略が自分の中で構築できない状態で情報過多のデジタル環境に放置されると、必要な情報を正確に捉えることがますます難しくなる可能性があります。デジタル・リテラシーというのは、三つ挙げましたが、自分の目的に合ったコンテンツを見つけ出し使えること、見るだけでなく目的に応じて自分でコンテンツを作ることができること、デジタル機器やアプリを使って情報交換ができること、などと言われています。これを教師と学習者とがともに身につけようとするのが、まずは大事なのかなと考えています。

おわりに

私たちは膨大な量の情報に囲まれて生活していて、先ほども申し上げたように、インターネットの空間というのは、自分に似たものが集まりがちな空間です。けれども実生活では、いろいろな意見や嗜好をもつ人たちとの共生が求められています。ですから、異なる立場にいる人たちの見解を正確に理解したり、繰り返しになりますが、意見と事実とを判別したり、信憑性を判断したり、それに基づいて自分で考えたり、考えたことを他の人に伝えたりといった能力を、できるだけ多くの人ができるだけ早く身につけなければならないという時代にあります。しかし、そういう能力は日常生活でスマホやタブレットを使っているだけでは身につかないと思うんです。むしろ難しくなってしまうかもしれせん。ですので、そのことを踏まえた上で、計画性をもった意図的な教育というのが必要になりますが、そのどこまでを国語科が引き受けるべきなのか、メディア・リテラシーについても言葉に関することなので引き受けていますが、話す聞く・書く・読むに加えて見るも私たちが引き受けるべきなのかといった議論があったように、どこまで国語科が引き受けるべきなのかという議論の余地はあります。しかし、言葉の教育の一つとして何かは引き受けなければいけないということはあると思うので、それについてまたこの後のパネルディスカッションも含めて、皆さんと考えていければと思います。

## パネルディスカッション

パネリスト	弘前大学教育学部 准教授	鈴木 愛理
	弘前大学教育学部 助教	帆苺 基生
	青森県立青森南高等学校	高橋 公子
ファシリテーター	青森県立青森南高等学校	亀田 睦典
記録者	青森県立青森東高等学校	木戸 智子
		川村 隆幸

〈亀田〉

最後のパネルディスカッションのパネラーの先生方をご紹介します。

パネリストとして、弘前大学から基調講演者でもある鈴木愛理先生、帆苺基生先生のお二方をお呼びした。今回は ICT をテーマに、具体的な授業活用策を探りたい。パネリスト 3 は、中地区委員長の高橋公子。ファシリテイトを私が務める。

まず先ほどの基調講演に対する質疑応答から伺いたい。質疑がある場合は挙手願う。

我々は普通の授業の中で、ICT は薬にも毒にもなることを実感している。ICT が教育においてどういう要素のときに薬や毒になるのかというところが理論的に語られた基調講演であったと思う。

事前アンケートの結果から改善の糸口を探りたい。

資料 P16 を参照。事前アンケートを Google forms を使ってアンケートを実施した。Q3 では掲示物や板書、模造紙や付箋紙など、今までの授業スタイルの代替として ICT が活用できているか、という質問になっている。基調講演にあった SAMR モデルの SA の段階である。その SA の段階の利活用ができていないか、という質問にした。結果は P17・P18 参照のこと。高橋先生アンケートをまとめた際の感想をお願いしたい。

〈高橋〉

最初は学校ごとでの情報入力を検討していたが、個別入力の方が特徴をより明確に把握できる可能性があると考え、個別入力に切り替えた。教員からの働きかけにおいてはデジタルツールを活用しているが、生徒からの情報集約の段階では教員発の利用に比べて少ないと感じている。資料の提示や調べ学習において、デジタルの辞書が使われていることに驚いた。自分自身は紙辞書が好きであり、調べ学習の全てをデジタルの辞書やタブレットで行うことに引っかかりを覚え、意外に感じた。

〈亀田〉

事前アンケートに回答したのは何人か？

〈高橋〉

47 名。

〈亀田〉

本日の来場者が 90 名弱のため、アンケートの回答が約半数となる。

Q3 について、実際のデータを取得するためのアンケートを行い、それぞれの使用状況を把握したい。

デジタル教科書やノートの代替として使用している人は？

～～挙手によるアンケート。使用者は少数～～

(挙手者への問いかけ)

オリジナルの教科書データではなくて、出版社の教科書会社のリリースしているデジタル教科書を使用しているのか？

＊＊挙手者の回答：教科書会社のデジタル教科書を使用している＊＊

貼り物の代替として ICT を使用している人は？(教師側の活動)

～～挙手によるアンケート。使用者は増える～～

チョーク記入の代替として事前に打ち込んでいる人は？(教師側の活動)  
～～挙手によるアンケート。使用者はある程度いる～～

班活動の模造紙や付箋紙の代わりに ICT を使用している人は？(生徒の活動)  
～～挙手によるアンケート。使用者は比較的多い～～

便覧や辞書の代わりに ICT を使用している人は？  
～～挙手によるアンケート。使用者は多数～～

Web 辞書の使用について、使用サイトを指定せず情報の正誤を問わない大雑把な使い方をしている人は？  
～～挙手によるアンケート。確認のみ～～

電子辞書や確かなサイトから調べないと玉石混交のデータを使用し、玉を掴んだり石を掴んだりする。石を掴んだ場合は、それを授業に生かすことが可能であると思う。  
それでは、鈴木先生からご感想をいただきたい。

〈鈴木〉

アンケートに触れる前に、今話題に挙がったことから少しお話ししたい。インターネットでの検索は言語活動であり、授業で取り入れることは悪いことではないが、大切なのは結果である。出典を明記し、他の情報と比較して選択した理由を説明できるかが重要。普段行っている言語行為を授業に導入することは有効である。会社でも勧められている BYOD (Bring Your Own Device) の考え方を取り入れ、プライベートで使用するデバイスを学習に活用することでメリットがあるが、プライバシーやセキュリティ、管理の問題も考慮すべきである。

アンケートによると、教師側にとってはペーパーレスや板書などの効率化や手間の削減が良い点であり、学習者側には書くことをはじめとする学習への抵抗感が減少し、個別に特性がある子供に対して個別対応も可能となる。教師側は慣れるまでの準備が大変という面も想定される。また、学習者側にとっては学習への抵抗感は減少するが、最終的に目指す姿を教員・生徒両者が共有することが必要であると感じた。

〈帆莉〉

私自身デジタルデバイスは便利で使用するが、その使い方が重要である。「玉石混淆」という話があったが、ジャパン・ナレッジという有料のオンラインデータベースがある。一部無料で利用できるものもあり、「玉石混淆」の「玉」としてアカデミックな情報を得ることができるため、大学生にはこのサイトを示すことがある。電子辞書も有用なデバイスである。情報の質が重要。無料で家でも見られるものとしてはコトバンクというサイトがある。ジャパン・ナレッジで見られるものの一部を見られるため、自宅で調べものをするときには、情報精度の高いこのサイトを見るよう話すことがある。限られた時間数の中で「玉」を掴む手段を提示することも大事だと思う。

〈亀田〉

ありがとうございます。

ジャパン・ナレッジの存在を知っていたという人は多いが、年間使用料を払ってまで使用するようにはなっていない。このアンケートは SAMR の SA について、現在の実施の有無、今後の展望についてだが、MR の部分に変容を起こしていくヒントになりそうなのは自由記述の方である。

資料 P18～20 に多々あるが、Q7 は ICT のメリットは何か。先ほどの鈴木先生の講演やいただいたアンケート結果からも、生徒の意見を集約しやすいとか、我々の作業が効率化するというメリットが得られる。

〈亀田〉

おそらく、我々が懸念しているのは、使わせる圧力によってデメリットが生じる可能性である。我々は使うよう促されているが、同時にデメリットもあるのではないかという心配がある。それにも関わらず、一旦は使ってみているが、今後もこのまま進むべきか疑問を感じている。この問題を解決するために、資料 P20 のデメリットに焦点を当てつつ意見をいただきたいと思っている。

鈴木先生、現場の教員の皆さんが感じていることについて、実際の授業の中で感じる人が多いであろう点について、

ご助言いただけると幸いです。

〈鈴木〉

ICTの使用により、書く力や記憶の定着なども含めて、身体的な側面が失われる可能性があると思う。しかし、現代の生活や教育においてICTを避けることは難しい。子供たちはICTに慣れ親しんでいるが、その影響をどれだけ自覚しているかが重要であり、教育者はその点を把握する必要がある。大学生を私は相手にしているが、これ以上スマホをやると目が悪くなるとか、睡眠時間が短くなるとか、自分は将来教員になるのにスマホに頼っていて、筆順どおりに字が書けないとか、分かってはいてもやめられないということが大学生でもある。高校生でもそれは同じであろう。ICTによる言語活動の実情や課題を教師と生徒が把握し、それを解決するためにどうすればいいか考えることが重要である。

〈帆苺〉

他教科と国語科の大きな違いは縦書きということである。これは日本文学が縦書きで書かれ、日本文学の論文も縦書きであるという伝統のもとにあるということである。ICTの導入は重要であるが、そうした伝統を尊重しながら取り入れる必要がある。デジタルと紙、縦書きと横書きなど、ハイブリッドなアプローチが求められるのが国語科である。

〈亀田〉

資料P20に列挙されているデジタル化に伴う危惧や課題に対して、デジタルでブレイクスルーを生み出す新たなアイディアはないか、周囲の方々と協議してほしい。

～～協議5分～～

〈亀田〉

では三沢高校の櫻井先生、いかがか。

〈櫻井〉

まず、デジタル化によって生じるデメリットを、デジタル化することによってクリアしようというのは、矛盾していないかという思いがある。

さて、既存の横書きのコンテンツを縦書きに変換するシステムを開発するアイディアが出された。また、手書きの時間を確保するために、Appleペンシルのようなデバイスを導入し、画面上に直接書き込む方法もあるのではないかというアイディアも出た。

だが、デジタル化に関する問題の解決は、教師レベルではなくシステムの開発や技術革新によって実現できるのではないか。

〈亀田〉

Appleペンシルのようなデジタルとアナログの組み合わせが、物理的な手触りや質感に影響を与え、思考や表現方法にも影響を及ぼす可能性があるのではないか。

〈鈴木〉

デジタルペンやタブレットによる文字の書き方について、慣れの影響があると考えられる。大学生がタブレットを使って授業を受ける際、慣れた学生は綺麗な字を書ける一方、デジタルデバイスに慣れていない人は自分の字ではない感覚を持つこともある。研究の対象者の慣れ度によって、デジタルとアナログの違いが影響するかどうかは異なる。タッチペンやタブレットを使用することで、字の美しさや表現方法が変わる可能性があり、書き方に関する個人差が存在する。

手書きやデジタル手法が文章の内容に影響を与える可能性がある。過去の研究によれば、毛筆やボールペンといった手段によって文章の構造や書き方が異なることが示されている。例えば、入試の小論文が毛筆で書かなければいけなかった時代と鉛筆で書くようになった時代とでは内容が変わったという研究がある。毛筆とかボールペンで書く場合には、書き直しができないので最初に結論を書くことがオーソドックスになるが、鉛筆と紙が高級品ではなくなると、まずメモを書くということを行くというところがスタンダードになるので、最初と最後に結論を書くという方がスタンダードになる。このように、手段が変わることで、文章の構成や書き方が変わる例も存在する。

個人差が大きく、今後も進化する状況下で、最適なツールを見つけることが重要である。子供たちにとっても、自分

に合ったツールや方法を見つけ、言語能力や意欲を向上させることが肝要である。

〈亀田〉

個人ごとに最適な手段やツールが異なる。Society 5.0 に向けても適切なスキルを持つ生徒を育成する必要がある。ここで、手書きとワープロのいずれが自分の考えをアウトプットしやすいか、アンケートをとりたい。～～挙手によるアンケート。手書きの方が多かった。～～

〈亀田〉

ワープロの方が自分の意見を表現しやすいと感じる人がいる一方で、手書きの方が表現しやすいと感じる人もいる。文章構造の変化に関連して、デバイスの進化によって文章の構造が変わる可能性も考えられる。ただし、個々の使いやすさや適応能力が重要であり、全員に同じツールを強制することは難しい課題である。

〈鈴木〉

青木先生の実践発表の資料P2で紹介されていた小野寺亜希子先生の研究では、SAMRモデルを基にしたSNS世代の打ち言葉を分析し、その実践開発に着目している。子どもたちが感想やコメントを紙に書く場合、悪く言えばダラダラと、長くたくさん書く。消すのが面倒だからである。しかし、デジタルデバイスを利用する場合は、短くまとめる傾向があることが報告されている。紙でダラダラと書いていた方が、教師はそこから大事なポイントやつぶやきを拾いやすいという特性もある。

だから、書かせる内容や形式は個人の感覚と実際の成果との間でズレが生じることがある。よって、単元やクラス毎に、紙で書かせたりデジタルで書かせたりと変えてみることもよいかもしれない。

〈帆苺〉

紙で読んだり書いたりする経験には、身体的な感覚や経験が関与していることがあり、それが学びや理解にどれだけ影響を与えるかを考えることは重要である。また、国語科において文章を読み書きする経験は、単にコンテンツの理解だけでなく、一つのトータルな人間としての経験としても価値があるという指摘は非常に興味深い。

お話を伺えて、非常に刺激的な考えを得ることができました。どうもありがとうございました。

〈亀田〉

個々の状況や目的に応じて臨機応変に最適なツールやアプローチを選び、常に改善と変革に挑戦する姿勢が大切である。

ご参加いただき、ありがとうございました。パネリストの先生方に感謝の拍手を送ります。お疲れさまでした。

## 部 会 の 動 き

- 1 令和5年度 青森県小・中・高国語教育研究協議会第1回理事会・研修会  
期 日 令和5年 6月 7日 (水)  
場 所 青森市立小柳小学校 校長室  
案 件 各部会活動状況報告  
令和4年度庶務報告  
令和4年度監査報告、決算報告  
令和5年度予算案審議、事業計画
- 2 令和5年度 青森県高等学校教育研究会国語部会第1回役員会  
期 日 令和5年 6月12日 (月)  
場 所 オンライン開催  
案 件 令和5年度役員改選及び承認  
令和4年度庶務報告  
令和4年度監査報告、決算報告  
令和5年度予算案審議、事業計画
- 3 高教研国語部会 各地区大会 (下記は担当校)  
西地区 柏木農業高等学校  
中地区 青森南高等学校 (※県大会を兼ねる)  
東地区 百石高等学校
- 4 第69回東北地区国語教育研究協議会  
※ 担当県 (福島県) が実施しないことを決定しています
- 5 令和5年度東北地区国語教育研究協議会 第1回役員会・研修会  
※4の中止に伴い、こちらも実施しない予定です
- 6 令和5年度 青森県高等学校教育研究会国語部会第2回役員会  
期 日 未定 (例年は1月～2月)  
場 所 未定  
案 件 令和5年度庶務確認、中間収支決算報告  
令和6年度予算案審議及び事業計画案、県大会実施内容
- 7 令和5年度 青森県小・中・高国語教育研究協議会第2回理事会・研修会  
期 日 未定 (例年は6と同時開催)  
場 所 未定  
案 件 各部会活動状況報告  
令和5年度庶務・中間決算報告  
令和6年度予算案審議及び事業計画案  
東北国研役員会報告

# 研 究 テ ー マ

紀要 (集)	年度	研 究 テ ー マ	会 場	会 員 数 (一・二希 望計)	大 会 加 参 加 数	大会 発表者数
35	平成2	○豊かな国語力を養う指導を求めて	八戸北高校	431	635	2
36	3	○豊かな国語力を養う学習指導をめざして	青森高校	408	263	6
37	4	○国語の力を高めるための効果的な学習指導のあり方	東奥義塾高校	409	247	2
38	5	○的確な読解と豊かな表現の指導を求めて	八戸南高校	390	227	2
39	6	○興味を持たせるための国語の学習指導	青森北高校	243	232	2
40	7	○主体性を育む国語教育の学習指導	弘前南高校	387	236	2
41	8	○新しい学力観に立つ学習指導	青森中央高校	372	205	2
42	9	○豊かな国語力を育む学習指導を求めて	八戸高校	393	267	6
43	10	○学力充実に図るための指導法を求めて	五所川原高校	367	166	2
44	11	○基礎学力の定着と応用力の充実にめざす学習指導	青森戸山高校	393	193	2
45	12	○確かな国語力を育てる学習指導のあり方	八戸西高校	377	168	2
46	13	○自ら学び自ら考える力の育成をめざして ー生きる力の指導法を探るー	黒石高校	357	170	2
47	14	○国語の力を高めるための学習指導を目指して	青森東高校	353	174	2
48	15	○生きてはたらく国語の力～不易流行の視点から	弘前高校	342	180	3
49	16	○豊かな国語力を育む学習指導のあり方	三沢高校	344	123	2
50	17	○「生きる力」と「夢」を問える国語力を求めて	青森南高校	322	138	2
51	18	○「確かな国語力」の充実に目指して	八戸東高校	297	125	2
52	19	○豊かな表現力と確かな読解力を高める授業を目指して	弘前学院聖愛高校	294	134	2
53	20	○確かな国語力と思考力の向上を目指して	田名部高校	300	103	2
54	21	○確かな国語の力をはぐくむ指導の在り方	青森高校	255	139	6
55	22	○人の中の国語 国語の中の人	木造高校	255	110	2
56	23	○「国語」の遠近法ー俯瞰と回遊ー	青森西高校	308	112	2
57	24	○伝え合う力を高める言語活動の充実に目指して	三本木高校	298	99	2
58	25	○「ことば」を大切にする国語教育の充実に目指して	弘前中央高校	298	134	2
59	26	○「言語活動」で引き出す主体的な学び	青森北高校	285	115	2
60	27	○確かなことばの力をはぐくむ国語学習 ー思考力・表現力を高める言語活動の充実に通してー	八戸高校	273	146	6
61	28	○感じる力、考える力、伝え合う力を高める国語学習をめざして	東奥義塾高校	267	115	6
62	29	“新しい学力”を錬成する“新しい学び”の探究	青森中央高校	264	106	2
63	30	○新しい時代に必要となる資質・能力を育む国語教育を目指して	八戸北高校	248	107	2
64	1	○「言葉による見方・考え方」を働かせる国語科授業の創造	弘前南高校	264	127	2
65	3	○「確かで豊かな学びの創造ー言葉による見方・ 考え方」を働かせてー	WEB開催	245	多数	1
66	4	○「ことばの力」を育み「学びの実感」ができる国語学習をめざして	八戸西高校	224	87	2
67	5	○変化する社会に主体的に対応できる“資質・能力” の育成～ことばによる見方考え方を働かせて～	アピオあおもり	231	76	2